五才になる男の子が、ある朝、庭に雀がちゅんちゅんしているのをみて、すずめをつかまえるんだと言ってとび出していった。手に棒をもってふりまわしている。どっかいっちゃったと言ってもどってきたので、どうやってすずめをとるんだいとたずねた。そうしたら棒をふりまわしてすずめをとると本に書いてあると言って、さしえ入りの本をもってきた。なるほど、中国のある地方では村人がみんなで棒をふって雀を土に近よらせないようにしてさわぎ立て、それが三日もつづくとすずめは疲れて地に落ちるのだそうである。この男の子はさっそくそれを実験してみたというわけである。半年ほど前には、この子は木の枝にセロテープをぶらさげて、すずめをとろうとしていたことがあった。こんどは友だちをつれてきてみんなで棒をふりまわすんだとはりきっている。

毎年学年末が近づくと、入園、入学のことでその年令の子どもをもつ親は真剣になっていろいろと考える。真剣になって親から目をかけてもらえる子どもは幸せである。しかしそれがちょっと度をこすと、親はあそこの学校・幼稚園に上げるのに熱中し、何が何でもそこにいれるためには何でもやろうという気になる。こうなると子どもに気の毒をしてしまう。子どもの頭の中には、おとなには思いもつかない考えがいっぱいつまっている。それを規格化してしまうのはいかにも残念である。テストの練習をさせておとなの答えを覚えさせたり、おとなの知識通りに子どもに教えようとしたり。一方には科学教育の振興が叫ばれながら、子どもの独創力や自分で考える芽をつんでしまうようなことが何と多いことであろう。幼稚園では多勢の子どもがいるから一人ひとりの考えをのばすことなどできないといわれるかもしれない。しかしだからといって、子どもが自分で考え、自分で発見してゆく芽をつんでしまってよいとは言えない。集団生活の中で個人の芽を伸ばしてゆくことは集団指導で欠くことのできない重要なことである。

幼児教育にいささかでもたずさわるものは、何がほんとうに幼児に役立つかということを本気に考えてゆく責任がある。そして子どもの生活と子どもの発達にプラスになるということを基盤にして、実際や技術を考えてゆかねばならないと思う。（T）

幼児の教育　第六十一巻　第二号

二月号　©　定価六〇円

昭和三十七年一月二十五日印刷
昭和三十七年二月一日発行

東京都文京区大塚町三五
お茶の水女子大学付属幼稚園内
編集兼発行者　津守　真

東京都文京区大塚町三五
お茶の水女子大学付属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五
印刷所　凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌ご購読についてのご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。